中根環堂初代学園長の掲げた建学の精神を概観しその現在化について考察する

橋本　弘道

二〇二三年六月十日に行われた鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウムは、「総持学園における仏教を基とした教育の歴史と今後の展望――総持学園創立百周年を記念として」をテーマとした。その基調講演として「中根環堂初代学園長の掲げた建学の精神を概観しその現在化について考察する」との題名で発表を行った。その内容をまとめたものが本文である。なお、本文は、文字起こしをする際、発表をもとに内容の補足及び再編成を行っている。実際の発表については、https://youtu.be/mg2VUrzvK0o にて視聴可能である。

それでは発表を始めさせていただきます。

まず、中根環堂初代学園長の教育理念について紹介します。総持学園は女学校から始まりました。在家の女子教育のための学校として始まったわけです。色々な資料を見ますと物質的・科学的教育、向外的・客観的教育とともに精神的宗教的情操教育、内性的主観的教育、智者を作るよりも徳者を作る。精神力の強い実行力のある人格的女性を養成するなどという教育理念が挙げられています。

続きまして「大覚円成　報恩行持」についてです。これが本学の二大眼目、教育理念です。詳しい部分につきましては、この後、宮崎専任研究員から発表があると思います。戦後に、「大覚円成　報恩行持」が二大眼目、教育理念として掲げられました。

その下ですが、「感謝を忘れず　真人となる」とか「感謝のこころ　育んで　いのち輝く　人となる」と、よりわかりやすい表現がしてあります。現在は、この表現も並記して教育理念として私たちの名刺などにも掲載されています。これは八代目学長の木村清孝先生が考案されました。

次に中根環堂初代学園長が語られている具体的な教育理念とはどのようなものであったのかということについて紹介します。まず「大覚円成」の部分ですが、木村先生が「真人となる」と表現された部分です。「入学式の挨拶」として話された内容ですが、大切な部分ですから読み上げたいと思います。

第一に本校の教育の方針はまことの人間を作るということです。利口な人間を作るのではない。物知りを作るのではない。本当に賢い、人間らしい人間を作るのです。あの人は勉強はそれほどでもないが金庫の鍵をあずけても大丈夫だ。ところが、あの人はよく出来るが油断がならん。あまり学問ができないけれど、信用して金庫の鍵をあずけられる人と、利口だけれど油断がならず金庫の鍵があずけられない人とどちらがよいか。あなた方はどちらの人間になるか。これを一つよく考えてもらいたい。単に利口だ利口だといって物知りになって何の役にたつか。

「知行合一」ということはどういうことか、物事を知らなければ行われない。知っているだけではだめだ。知ったことを行って始めて知ったと言える。だから知るは行いの始めなり、行うは知るの終わりなり。知ったことを行ってこそ始めて本当の人間になる。物を知ったという事である。だからここでは裏表のない、玉のごとき人格

を備える様に教育していっているのです。そしてそのうえにいかなる苦難にも打ち勝つ人になってもらいたい。これは私はいつでも言っていることです。であるからまず本校では物知りという事よりも、本当に堅い信念のある人間を作るのが根本であります。

続いて「報恩行持」、「感謝を忘れず」の部分です。こちらも読み上げたいと思います。

もう一つ申したい。報恩の社会化というものがありますが、この学校はご開山の報恩のために建ったのですから、いかなるものについても報恩の二字がついています。恩を忘れるものは人間ではない。第一親の恩を忘れるものは人間ではない。互いに同情をもち共存共栄をして行くについてはどこまでも一つの「おかげさま」で暮らしておるという感謝の心をもつことです。こうやって学校へ来るのも親のおかげ、学校のおかげ、電車のおかげ、靴のおかげ、皆のおかげで来る。自分だけで出来るものではない。ありがたいと思ったらそれに対して感謝の念をもつ、その心を持てば不平不満というものは何にもなくなってしまってありがたくその日を暮らして行く事ができる。（中略）どこまでも、おかげさま、報恩感謝の念ということが大切だということを常に私は言っています。

これと同時に、勤労精神を鼓吹しなければならない。また、大いに勉強しなければなりません。ところがうちの生徒は感心ですよ。学校でも、私の方から言わん事まで毎朝やっている。こちらからいいつけなくてもちゃんと講堂をふく、道で、おじいさんが、リヤカーをひいていると、あとから押してやる。そういう事の感謝状が、私の所にたくさんきている。うちの生徒は大変感心だと私は思っている。（中略）またここで、赤い羽根、白い羽根などにも協力しますが、あれでもね、日本一の同情金を集めて、先日も市から、大いに表彰して下さって、大きな、顕微鏡を二個もいただいた。こんなふうにここの生徒はよくやってくれ、非常に働きます。非常に勤労の

精神があります。ですから皆様、この勤労精神、人に同情をするという事を、忘れんようにしてもらわなければなりません。

こういう事を私は常に言っています。（中略）昔の人は「勤むれば、禄その中にあり」といった。「陰徳あれば、陽報あり」といった。こういうような風に、ずっと説いてきたのです。こういうようなわけで、とにかく今の人のようにではなく、どこまでも勤めるというふうに教育するのです。

総持学園は、大正十三（一九二四）年に創設されました。したがって、令和六（二〇二四）年、来年でちょうど創立百周年を迎えることになります。本学は、横浜市中区大岡町にあった光華女学校を中根環堂先生が受け継いだことから始まります。もともと武安という方が校長をされていました。関東大震災によって校舎が倒壊してしまい、その時に武安氏もお亡くなりになられました。そして、その弟さんが誰か学校を引き継いでくれないかということで中根環堂先生にお願いをしたというのが本学の始まりです。環堂先生が光華女学校をお引き受けになって、大正十三（一九二四）年四月二十一日に総持会館において開校式が行われました。全校生徒十六名からの出発でした。こちらがその総持会館の写真です。現在の南区大岡あたりにあったと推測できます。

これが、中根環堂先生の写真です。この頃はまだ大学が設立されていませんでしたので初代校長という表現がされています。左側が戦前のお姿で戦後のお姿が右側です。戦前は髭を蓄えられていましたが、戦後は剃られました。これは、意識的になさったようです。時代が変わったので私も変わりますと仰ったとのことです。昭和十八（一九四三）年までは、駒澤大学で教鞭を執りながら本学の校長を兼務されていたようです。

大正十四（一九二五）年二月になりますが、光華女学校を引き受けてから一年後のことです。大本山総持寺瑩山禅師の六百回大遠忌記念事業として、新しく鶴見高等女学校が併設されます。こちらは新しくつくった学校で、それから

は、女学校と高等女学校という形で歩んでいきます。

光華女学校は実業学校で鶴見高等女学校は、その名の通り高等女学校ということになります。

昭和五（一九三〇）年に光華女学校を鶴見職業学校という名前に変更しています。しかし、翌年の昭和六（一九三一）年には、光華女学校に戻しています。こちらが当時の学校制度を表した図ですが、光華女学校は実業学校で、鶴見高等女学校は高等女学校という分類になります。実業学校と高等女学校とを併設したということが創立当時の様子であったことが分かります。

続いて、その頃の教育理念、二大眼目ですが、「恭検修得　愛敬報恩」という言葉が掲げられています。現在は、「大覚円成 報恩行持」ですが、戦後にこちらに変更されました。当時は、四大標語というものも掲げられていて、一、仕事の運動化　一、所言の実行化　一、天資の達成化　一、信念の確立化　といった四つの標語が四大標語として掲げられていました。

次に校歌です。現在の附属中高が本学園の起源です。ですので、附属中高が總持学園の中で一番歴史が長いということになります。本学創立当時からの校歌ですが、新井石禅禅師が作詞をされています。新井石禅禅師は、初代校主です。

一、富士の高嶺は窓近く
　通う松風法の声
　鶴見が丘の学舎に
　咲くや懐しき文の華

二、師のみ教えに順いて

勤め励みつ身を鍛え
固き心に清き愛
恭倹ふかく徳つまん

三、弥栄えゆく民主国（戦前：大御國）
護るは吾等が務めなり
恩も義もいと重し
能力の限り尽さばや

というのが校歌です。三番ですが、今は、「弥栄えゆく民主国」となっていますが、戦前は、「弥栄えゆく大御國」と歌っていたようです。

こちらが昭和十年頃の校舎です。写真が残っていましたので掲載をしておきました。こちらが、上から見た図です。校舎の後ろ側にグラウンドがあります。今は、周りに家が建っていて、グラウンドの後ろにもマンションが建っています。当時は、今ほど家が建っていなかったことが分かります。

昭和十二（一九三七）年に、光華女学校を鶴見第一女学校と校名を変更しています。

昭和十四（一九三九）年に道守地蔵尊開眼供養とあります。生徒であった久喜登喜子さんが京浜急行の踏切で電車に跳ねられて亡くなるという痛ましい事故がありました。その時に生徒たちが募金を集めて供養のために建てたのが道守地蔵尊です。今も附属中高の正門を入った左側に安置されています。それについての詳しい縁起は、この『温故知新』という冊子にも載せてあります。『温故知新』は、創立当初からの資料を集め直して作ったものです。詳しくはこちらをご覧いただければと思います。

続いて昭和十八（一九四三）年です。かなり苦労して校舎を建築してきましたが、その年に、講堂を除いた校舎のすべてを消失してしまいます。この時に環堂先生は、かなり落胆なさったようです。ですが、卒業生などからも励まされて、再建に努められました。

環堂先生は、昭和十七（一九四二）年に駒澤大学の学長に就任されています。その一年後に、本学園がほとんど焼けてしまいました。そのため、駒澤大学の学長を辞任されて、こちらの学園の立て直しに取り組まれることになります。

昭和十九（一九四四）年ですが、学園の経営母体である総持学園を財団法人総持学園にしています。さらに、昭和十九（一九四四）年に、鶴見第一女学校を鶴見女子実業学校に校名変更し、その後、すぐの昭和二十二（一九四七）年に元の鶴見第一女学校に戻しています。そして、この年に、鶴見女子中学校を併設しています。

続いて、戦後の話に移っていきます。二大眼目が、「大覚円成　報恩行持」という今の形になっています。そして、垂訓として、戦前までの二大眼目が掲載されています。八大綱領であるとか、日訓というものも本校の教育目標として新たに掲げられています。

続いて昭和二十五（一九五〇）年ですが、坂本学園興国中学校・高等学校を継承経営とあります。今の荒立の女子寮があるところに男子校があったようです。そこの後ろ半分が、現在は寺尾小学校になっています。当時は、本学の敷地でしたが、短大校舎建築の費用を調達するために、一部が横浜市に売却されました。それで、現在は、後ろ側半分が寺尾小学校になっています。その後、残りの土地に現在の女子寮などが建てられ、附属中高の手を離れ、今は大学の管理になっています。現在は、百名程度が収容できる立派な女子寮が建っています。

この頃の募集要項ですが、鶴見学園中学校・高等学校とあります。こちらはもともと男子校だった訳です。女子校から始まった学校ですけれども、共学ではなくて多分併設という形で運営したんだと思います。ですから、男子校を一時期運営していたということになります。

それから鶴見女子成人学校ですね。洋裁であるとか和裁であるとか、書道などを習うための学校もありました。こちらは、現在の生涯学習講座につながるのだと思います。女子のみの募集でした。鶴見女子中学校・高等学校、鶴見学園中学校・高等学校、鶴見女子成人学校という三種類の学校を経営していたことが分かります。

これが今の地図です。上の部分に寺尾小学校が建っています。この区画全部がもともとは本学園の土地であったということです。

続いて先ほどの入学式の挨拶の中にもありましたが、昭和二十四（一九四九）年に赤い羽根共同募金で全国一位の表彰を受けています。これにつきましても、冊子『温故知新』の「鶴見の職員会議と断食写経会」の中に書かれています。よろしければご覧いただければと思います。

昭和二十六（一九五一）年に学園の経営母体である財団法人総持学園を学校法人総持学園に変更しています。

昭和二十六（一九五一）年に和光館落成とあります。先ほども触れましたが、昭和十八（一九四三）年に講堂を残して校舎がすべて燃えてしまいました。その後、校舎の再建が進んでいきます。

昭和二十八（一九五三）年ですが、ここで鶴見女子短期大学が設立されます。創立三十周年記念事業として、まず、国文学科を設立しています。次に、昭和三十一（一九五六）年ですが、鶴見女子短期大学幼稚園教員養成所が設立されます。私は保育科に所属していますが、オープンキャンパスで、このことについて高校生にお話をさせていただくことがあります。現在残っている神奈川県内の保育者養成校では、一番歴史の古い学校が本学ですので、そのことについてお伝えすることにしています。

こちらが、「本学の特色」について述べられた文章です。どうやら最初から四年制大学まで設立したいという意思があったようです。ちょうど赤で囲んだ部分ですが、「本学園は男女共学を理想とはしまするが、我が日本に於いては、時期尚早と信じまするので、男女共学を避けて女子短期大学を設立し、女性には女性に応はしき女性教育を施し、気

品高き、実際に役立つ女性を陶冶するのである。」とあります。また、「本学園は今回短期大学として出発しましたが、漸次各学科目を増加し、第一流の専門の学者を招聘し、内容を充実して外観を整備し、将来は四年制大学をも建設し、京浜間に最も誇るべき一大金字塔の学園を実現せんことを期しています。」ともあります。短期大学を作るときに、もうすでに、四年制大学も設立したいと考えていたようです。

昭和三十四（一九五九）年ですが、ちょうど設立から三十五周年になります。この設立三十五周年の記念講演で、ノーベル賞受賞者である湯川秀樹先生をお招きして「科学文明の行方」という題名で記念講演を開催しています。記念講演の当日、環堂先生は、朝から陣頭指揮を執っておられましたが体調が優れなかったようです。その日の午前中に毛筆で「温故知新」という文字をお書きになられました。その文字を書き終えられた後、湯川先生がいらっしゃったということでお迎えに出られたときに撮影したのがこの写真です。手前右が中根環堂先生、その後ろにいらっしゃるのが湯川秀樹先生、写真左側が当時学監をされていた中野愚堂先生、さらに、その左が義理の息子さんである中根専正先生です。

湯川秀樹先生の講演が始まる前に、湯川先生の紹介をされているのですが、そのときの音声が残っています。湯川先生を紹介された後に、後ろのご自分の席に戻られて座られたときに、そのまま、うな垂れてしまわれたそうです。その後、保健室に運ばれたようですが、そのまま、亡くなられました。ですから、創立三十五周年の記念式典の時に亡くなったということです。そのときの音声が残っていますので、四分くらいですが、お聴き頂ければと思います。

湯川秀樹博士先生をご紹介します。ただ今、私が、湯川秀樹先生と申し上げたらその名前を聞いただけで、みんなびっくりして、驚いたような顔つきを致しました。でありまするからいたして、それほど皆さんがすでに先生をよくご承知でありまするからいたして、私がここでご紹介する必要はないでありましょうけれどが、言うま

でもないが、念のために申し上げますが、先生は京都大学の教授であらせられ、そして米国コロンビア大学のまた教授であらせられ、ノーベル賞の受賞者で、日本でたった一人のお方でありまする。世界の学会におけるところの権威者であらされまする。実に世界的大偉人、世界的大学者であります。このお方が京都に住んでおられる。ところでこんな立派な方が京都においでになるということは、京都の名誉である。京都の光栄であるというもので、京都の名誉市民として推戴することになったのでありまする。私から申しまするというと、京都だけの名誉市民でなくいたして、私は日本全体、国民全体の名誉必人であると崇め奉りたいのでありまする。実に日本、世界的大学者、世界的大偉人であられます。さあて、かかるお方でありまするから世界一忙しいお方でありまする。と申しますのは私、先般、京都に参りまして今日の講演をお願いに参りましたところが、訪問者がたくさんおいでになって、私に三分の話も十分にすることができないほど、お忙しいお体でありまする。しかるにもかかわらず、万難を排し万障を繰り合わせて、そして、今日わざわざ遠方京都から本学園のために講演においてくださった。実に本学園の名誉、これに優るものはありません。ただ本学園の講演、名誉ばかりではない。聴衆の皆さんも私はそうではないかと思いまする。この世界的大偉人、大学者のご講演を、ラジオやテレビを仲ぜずして、直接に、目の当たりに承るということは、誠に難値難遇で得がたい。こんな機会は滅多にありません。私は滅多にないというよりも絶対にないと申したいほどでありまする。であるから、一期一会ということがありますが、その思いで、今日は皆さん謹んで、一句一言も聞き漏らさずと、大いに傾聴をしていただきたいということをお願いし、これから先生にご講演を願いたいと思う。先生は、今日は、「科学文明の行方」、「科学文明の行方」……についてお話を願いますから、どうか、ご傾聴下さい。ありがとう。

これが最期の言葉です。非常に力強い声だなと思います。この直後に亡くなるとは、とても思えないお話だなと思

います。ちょうど、学園の三十五周年の式典の時に亡くなられたことになります。

環堂先生は、毎年お正月に遺言状を書かれていたようです。周囲からは縁起が悪いのでやめてほしいと言われたこともあったようです。しかし、何があるか分からないからと、必ず遺言状を書かれていたようです。環堂先生がこういう形でなくなられたのでその遺言状を開いてみると、二代目の学園長は、三澤智雄先生にお願いして欲しいと書かれていました。過去に書かれた様々な学園に関する資料を読みましたが、学園の歴史については、三澤智雄先生が残された文章がたくさんあり、総持学園はこういう学園だったとか、環堂先生との思い出はこういうことがあるとか文章がたくさん残っているという印象があります。三澤智雄先生も環堂先生のことを尊敬されていたのでしょうし、環堂先生も三澤智雄先生のことを信頼していたというか、次に学園を任せられるのは、三澤智雄先生だという思いが強かったのかもしれません。

三澤先生のご経歴ですが、本学の教員をされていたのはもちろんのこと、世田谷学園や愛知学院の先生もされていました。そして、世田谷学園の校長をされた後に、長野県の頼岳寺のご住職をされていました。環堂先生の遺言状に、次の学園長は三澤先生にと書かれていましたので、ぜひ、三澤先生に次の学園長になっていただきたいと先生方でお願いに行ったようです。最初はなかなか引き受けてくださらなかったようです。それでも、どうしてもとお願いして、就任して頂くことになりました。

そして、三澤先生が学園長のときに、四年制大学が設立されることになります。資金約六千万円のうち五千万円を高校の特別会計より捻出しました。その頃の教員の給与は、県教員の給与の男性は三分の一、女性は二分の一だったようです。定年退職される先生が退職金の一部を学校に寄附なさったときも、大学の設立資金に回したということです。四年制大学創設については、三澤先生も大変に苦労されたようです。中高は長女である、大学は次女で生まれて間もない。この子も立派に成長させなければならないとの思いがあったようです。大学と中高が設立資金の問題で不

仲にならないようにという配慮からか、なるべく普段は中高にいらしたようです。三澤先生ご自身も大変な心労があったのではないかと思います。

昭和三十八（一九六三）年ですが、創立四十周年の記念式典が行われています。二祖国師峨山紹碩禅師六百回大遠忌事業として、鶴見女子大学が開学されます。

昭和四十二（一六九七）年ですが、学園長就任九年目だったと思います。三澤先生は、体調を崩され入院されて、その後亡くなります。入院し手術をされた時期が、中高の文化祭の時期でした。文化祭の準備が順調に進んでいるかということなどを気にされていたようです。自分は手術で死ぬようなことはないと思うが、万が一のことがあったら、校庭に「弥勒菩薩の下生を待つ」と記した石を置いて欲しいと仰ったそうです。その意味とは何であったのかということを森田孝観先生が推察され文書として残されています。それについても、『温故知新』という冊子に掲載しています。

「まことの智慧にめざめて空に徹し、小さな自我を捨てて生きとし生けるもの、あらゆるもの、自分の仕事に対しても深い愛情を持って努力していく」そのような「物心両面に完備する真の文化が地上に創り出されること」を祈り、そのような物心両面の豊かな学園として、学生、生徒をこれからも教育していって欲しいと願われていたのではないかとのことです。

三澤先生は校庭の石に刻んで欲しいと、そこにあった紙に走り書きで、「待弥勒菩薩下生」と書かれました。現在は、その文字が板に刻まれて、弥勒菩薩の像とともに附属中高の校庭に残してあります。新校舎が建つ前は、正門を入ってすぐの校舎である光照館の前に建っていました。今は、正門を入って左側の道守地蔵尊が建ってる横に移されています。三澤先生は物質的にも精神的にも豊かな学園として成長してほしいと願われていたのだと思います。

実業界では、中根環堂先生や三澤智雄先生と同じような思想を持っている方がいらっしゃるので掲載しておきまし

た。上は松下幸之助さんの言葉です。松下電器、パナソニックの創業者です。一部ですが読みあげたいと思います。

「まだ会社が小さかったころ、従業員に、『お得意先に行って、きみのところは何をつくっているのかと尋ねられたら、松下電器は人をつくっています。電気製品もつくっていますが、その前にまず人をつくっているのですと答えなさい』とよく言ったものである」

すぐれた製品をつくるのは会社の最優先の使命です。しかしそのためにはまずすぐれた人材を養成しなければならない。そうすればおのずといい製品がつくれるようになり、事業も発展していくというのが、幸之助の一貫した信念でした。

この「人をつくる」ということについて、幸之助は「単に仕事ができ、技術がすぐれていればいいというものではない」と説きます。会社の使命や仕事の意義を自覚し、自主性と責任感をもった人、すなわち人間として、社会人として立派な人であることが大切で、そうした人材を育てることが、企業の社会的責任の一つとしてきわめて重要であると考えていたのです。

（ＰＨＰ研究所 松下幸之助.com　ＨＰより）

松下幸之助は、松下電器は何をつくっている会社かと尋ねられたら、人をつくってる会社です。あわせて電気製品もつくっておりますと答えなさいと普段からおっしゃっていたようです。

赤字のところを見ますと、人間として社会人として立派な人であることが大切でそうした人材を育てることが企業の社会的責任の一つとして極めて重要であると考えていたとあります。とても教育的な発言だと思います。

中根環堂先生は、「物知りになって何になるのか、物知りになるより人から信頼される人になって欲しい」と常々仰っていましたが、それと同じようなことを、経営の神様と言われた松下幸之助も言っています。

下は、最近お亡くなりになられましたが、京セラの稲森和夫さんの言葉です。一番最初に、「動機善なりや、私心なかりしか」とあります。大きな夢を描いてそれを実現しようとするときには、その動機が本当に正しいかということを自らに問わなければならない。私心がないことを一生懸命世の中のためになると思ってやっていれば、それは自然と成功するものだということが書かれています。

『動機善なりや、私心なかりしか』

大きな夢を描き、それを実現しようとするとき、「動機善なりや」ということを自らに問わなければなりません。自問自答して、自分の動機の善悪を判断するのです。

善とは、普遍的に良きことであり、普遍的とは誰から見てもそうだということです。自分の利益や都合、格好などというものでなく、自他ともにその動機が受け入れられるものでなければなりません。また、仕事を進めていく上では「私心なかりしか」という問いかけが必要です。自分の心、自己中心的な発想で仕事を進めていないかを点検しなければなりません。

動機が善であり、私心がなければ結果は問う必要はありません。必ず成功するのです。

（稲盛和夫　京セラフィロソフィ　京セラＨＰより）

実業界で大きな成果を残した方々と同じようなことを中根環堂先生も三澤智雄先生も仰っていたのではないかと感じます。

続いてですが、三澤智雄先生が亡くなられた後、昭和四十五（一九七〇）年に本山開祖瑩山紹瑾禅師六百五十回大遠忌事業として歯学部が設立されます。

その後、昭和四十六（一九七一）年に鶴見女子短期大学が、鶴見女子大学短期大学部へと名称変更されます。さらに、昭和四十七（一九七二）年には、鶴見女子大学が鶴見大学になり、歯学部が共学になります。それ以外の学部は女子のままでした。

これまでの資料ですが、ほとんどが、附属中高の機関誌である『鶴の林』や周年記念誌などから引用したものです。「鶴見女子の教育理念とその根本方針」「本学特色の真教育」「中根環堂初代校長の教育理念」といった題名で中根環堂先生の教育に関する考え方が掲載されています。もともと私は、当時の鶴見女子中学校・高等学校の教員でした。就職した一年目に、本学園がどんな歴史を持つ学園なのかということに興味を持ち、図書館などにあるいろいろな資料を読みました。それをまとめたものを『温故知新』という題名をつけて緑色のＢ５版の冊子にしておきました。当時は、それを年齢の近い先生方に配ったりしていました。それを最近になって、今日、後ほど発表される上野正人先生が再編集して下さって、同窓会の資金などもいただいて、Ａ４版のしっかりとした紫色の冊子にして下さったのが、この会場に置いてある『温故知新』と題名のついた冊子です。ぜひ、お読みいただければと思います。

続きまして「仏教を基とした教育の確立」とありますが、環堂先生は、いろいろな印象深い言葉を仰っています。その代表的なものとして次のようなものが挙げられるのではないかと思います。

・教育の根本は人物を作ることである・一点になりきれ・平常心是道・茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す・随所に主となる・勤むれば、禄、その中にあり・陰徳あれば陽報あり

これらは、必ずしも、環堂先生のオリジナルというわけではありません。しかし、非常に印象的な言葉の数々だと思います。その中でも特に、「一点になりきれ」ということを頻繁に仰っていたようで、それが校庭に安置してある胸像の下にも記されています。

先ほども触れましたが、これらの資料は、機関誌である『鶴の林』や『周年記念誌』にまとめられているものから

引用しています。ですが、特に『鶴の林』は、だんだん年を経ることで紙の劣化が進んでいます。ですから、鶴見大学仏教文化研究所では、それらをデジタル化する取り組みを始めています。

次は、私立学校ならではの独自の呼称と文化について、お話ししたいと思います。現在の附属中高は、教科教育型の校舎になっていますので、各棟に独自の名前がついているということはありませんが、一つ前の校舎にはそれぞれ本校ならではの名前がついていました。例えば、・光照館・浄光館・精進館・慈眼館・発心館・道光館などという名前です。クラス名も・英・孝・仁・敬・貞・正・恭・愛・礼・和・信・恩・明・徳・円・修・順・律という名前がついていました。クラス名は今も使っていると思います。学級委員長・副委員長は、級監・副級監と呼んでいました。今はどうなっているんでしょうか。生徒会は蕙風会（けいふうかい）、ＰＴＡは保護者と先生で車の両輪のように子ども達を導いていくという意味で双輪会という名前をつけていました。

この写真が、六十周年から八十周年くらいを迎える時の中高の全景です。真ん中にあるのが、六十周年記念講堂です。その後、講堂と体育館の間に、教科教育型の新しい校舎ができました。左側にある建物が創立六十周年記念講堂で、右側にある建物が創立五十周年記念体育館です。真ん中の教科教育型校舎は、特に何周年記念という文言はついていません。この校舎は、中根環堂先生が亡くなって五十年目、創立八十五周年くらいに建設されていますので、創立八十五周年記念教科教育型校舎という名前をつけて後世に残してはどうかと個人的には考えていました。

本学では、仏教教育の精神、建学の精神を顕現するものの中心道場を講堂と位置付けています。最初に建設された講堂は、昭和十二年に落成されています。それから、その頃の学園の教育方針として、「仕事の運動化」・「天資の達成化」・「信念の確立化」・「生活の簡素化」・「所言の実行化」が挙げられていました。時期に応じて若干アレンジが加えられていたりもしますが、中根環堂先生が亡くなられてからは、二大眼目が重視されて細かい方針などが資料からはあまり見えなくなります。環堂先生から始まって歴代の校長先生は、全訓という授業時間を使って生徒に教育理念

を伝えていました。

附属中高では、教育の根幹を成すものとして朝礼があります。毎朝、心を落ち着けて一日を始めるために朝礼を行います。黙念から始まり、黙念で終える学校生活を今も送っています。朝礼ですが、聖歌を歌ってお経を読みます。お経は、一学期が般若心経、二学期が観音経、三学期が修証義です。

この写真は、講堂での朝礼の様子です。最初の講堂は板張りだったので、そこに全員が正坐をして朝礼を行い一日を始めていました。今は新講堂になり割り当て学年の当番クラスが壇上に上がって、それ以外の生徒は椅子に座り、さらに、その他の学年は校内放送で朝礼を行う形になっています。

こちらは、モロカイ観音です。これについても『温故知新』の中に、縁起が掲載されています。ハワイのモロカイ島の病院の患者さんたちを励ますために本学が送ったものです。その病院が役割を終えて閉鎖されることになったので本学に戻ってこられました。現在は、教科教育型校舎の一階に安置されています。

こちらは、附属中高の年間宗教行事です。花まつりから始まって、学校授戒会もありますし、精霊祭や両祖忌など、年間を通して宗教行事がたくさんあることについての紹介です。

本学園は中根環堂先生が中・高・短期大学を設立され、その後、受け継がれた三澤智雄先生が四年制大学を設立されました。ですから、総持学園においては、このお二人が教学の両祖であるといって良いのではないかと思います。

八十周年から九十周年にかけての大きな変革ですが、この頃に附属中高も女子教育から男女共学に移行していきます。大学は先に共学になっていましたが、附属中高は女子教育を続けていました。附属中高の八代目の校長が伊藤克子先生です。もともと鶴見大学短期大学部で教授をされていた先生です。その先生が学園初の女性の校長として就任され、そのときに、附属中高を男女共学にされました。これは、非常に象徴的なできごとだと思います。女性の自覚と向上を目指して、女子校から始まった学校を学園初の女性の校長が男女共学にしたということですから、ある意味

では、女子のみの教育についてはある程度目的が達成され一段落つき、次の新たな展開を迎えたといって良いのではないかと思います。それから、もともと、在家の女子教育からはじめた本学ですが、二等教師の資格が取れる宗侶養成コースもできました。また、そのときに、さきほど紹介した教科教育型校舎の新築なども行われました。

もともと、附属中高が本学園の発祥であり、鶴見大学と当時の鶴見女子中高は、併設という位置づけでした。その後、併設から附属へと総持学園の再編成が行われました。そういう意味では八十周年から九十年の間というのはかなり大きな変革が行われた時期だといえるのではないかと思います

次に、「学園創立百周年を迎えて」です。「建学の精神の現在化・建学の精神の日常化」などを挙げています。創立百周年を迎えるわけですが、三十年くらい前は、中根環堂先生が生きていらっしゃった頃のことをご存知の先生方がたくさんいらっしゃいました。しかし、だんだんと少なくなっていって、今は、もう、いらっしゃらないのではないでしょうか。その中根環堂先生から薫陶を受けた先生方から教えを受けた教員も、もう、五十代、六十代という状況です。私が奉職した頃は、先ほどご紹介した、三沢智雄先生から「弥勒菩薩の下生を待つ」という言葉を受け継がれた森田孝観先生などがいらっしゃって、本学の教育に対するいろいろな考え方などを教えて頂きました。そう考えてみると、その先生方から教えを受けた最後の世代が、ちょうど私と同世代ということになるなあとあらためて感じています。ですから、もう一度、この中根環堂先生の思いとか三澤智雄先生の思いなど、どういう思いでこの学園を育ててきたのかという思いを振り返り、これからの学園をどう発展させていくかということを考える良い機会にしていくことが大切なのではないかと思います。

それから未来を生き抜く人材の育成を今まで以上に推し進めていく必要があると思います。時代の流れはどんどん速くなってきています。ですから、中根環堂先生が仰ったように、本当に信念を強く持って、しっかりと地に足をつけて生きていけるような、そして、本当に信頼に値する人材になるような学生や生徒を育てていくことが、今まで以

上に重要になってくるのではないかと思います。そして、用意されている答えにたどり着く能力はもちろん大切ですが、答えがないものに自分なりに答えを出してしっかりと前を向いて歩んでいく強い意志と能力というものが、これから、より求められていくことになるのではないかと思います。

環堂先生は、「いかなる悲運にあうとも、いかなる逆境に処するとも、ビクともせず泰然自若として、困苦欠乏にも耐え忍び、艱難辛苦をも克服し、きぜんとして運命を打開し、日日これ好日と喜んで人生に処する精神力強き女性としなくてはならぬ。」と仰っています。また、先ほども触れましたが、「一点になりきれ」ということをしきりに仰っていたということです。私たちもその教えを受けて、地に足をつけて、「一点になりきって今を生きていく」、そういう心構えで過ごしていくことが、これからますます大切になっていくように思います。そして、それが中根環堂先生や三澤智雄先生の心に沿うあり方なのではないかと感じます。

「黙念で始まり、黙念で終わる学校生活」という題名で、後ほど上野正人先生が附属中高の学校生活についてお話し下さいます。黙念は、マインドフルネスであると言えるかもしれません。最近は、世間的にも、マインドルネスということが非常に言われていて瞑想が流行ったりしています。流行廃りでこのようなことを語るのはどうかと思いますが、瞑想をして心を落ち着かせるということが頻繁に取り上げられています。それだけ時代の流れが速く、多くの人が追い立てられるように人生を過ごしているということなのではないかと思います。そのようなときに、立ち止まって落ち着きを取り戻す。自らのこころ持ちを省みる、そのようなことが求められているのかもしれません。マインドルネスと横文字になっていますが、もともと仏教の禅定がそのもとになっていると言われています。仏教では、禅定を大切にしてきました。曹洞宗は、その禅定をとても大切にしてきた宗派です。マインドフルネスでは、今、この瞬間にこころを集中することが説かれます。これは、中根環堂先生が仰っていた「今を生きる」とか「一点になりきる」という言葉につながっていくのではないかと思います。マインドルネスについては一般的には効果を期待して行

うものですから、曹洞禅のように効果を期待せずにただ坐るということとは、ある意味、対極にあるのかもしれません。しかし、在家の方々にとっては、坐禅の入口になることもあるのではないかと思います。こういう体験を通じて、もちろん附属中高で行われている黙念も坐禅の入り口として重要な位置づけがされているわけですが、さまざまな形から坐禅に入っていくということができれば良いと思います。そして、附属中高の生徒たちも毎朝黙念から一日を始めているわけですが、そのようなことを今後も大切にしていければ良いのではないかと思います。

「大覚円成　報恩行持」を、木村清孝先生は、「感謝を忘れず　真人となる」「感謝のこころ　育んで　いのち輝く人となる」と表現されました。「報恩行持」について「感謝を忘れず」という言葉と「感謝のこころ　育んで」という言葉を当てています。ここに、スコット・アラン（弓場隆訳）の『毎日を好転させる感謝の習慣』という本を取り上げさせて頂いています。この本には、感謝の気持ちを持つと、自分自身の幸福感も高まっていくということが書かれています。そして、仏陀の言葉であるとか、マインドフルネスの提唱者であるティク・ナット・ハンの言葉、ダライ・ラマ十四世の言葉なども入っています。「報恩行持」に関する理解が進む一冊であると思い、紹介させていただきました。

中根環堂先生以来の学校行事の形骸化を防ぐためにも、二大眼目に込められた本来の意味についての再確認とそれらの現在化が必要なのではないかと思います。実際に形骸化しているとは思っていませんが、改めて、未来にあった「大覚円成　報恩行持」の解釈も同時並行的に進めていかなければならないと思います。そして、中根環堂先生が、最後に残された「温故知新」という言葉もありますので、これまで行われてきた教育をもう一度振り返り、さらに信念を固めることで、次の百年に向かって本学が発展していくことを祈念したいと思います。

仏教は、苦からの解脱を説いています。裏を返せば幸せの追求ということになるのかなと思います。「大覚円成　報恩行持」の中に込められた自分と世の中のために真の幸せを追求する行為ということについても考えてみると良いの

ではないかと思います。その良い機会にできればと感じます。

次ですが、武蔵野大学の取り組みを取り上げています。私学新聞に掲載されていた記事です。そこに武蔵野大学の創立が一九二四年と書かれていました。同じ仏教系の大学で、あちらは浄土真宗系の大学です。設立が同じ年なので、来年、創立百周年を迎えるということです。本学と同じ時期に創設されたんだなと思いながら記事を読んだのですが、ウェルビーイング学部を創設するそうです。ウェルビーイングを簡単に言えば、幸福学を横文字にしたということになります。人間としての幸せとは何かということを追求する学部を世界で初めて立ち上げるようです。

私たちの学園も、この武蔵野大学の取り組みを参考にし、未来を生きる子どもたちの幸せとは何かということを考えながら、これまで以上に発展していければ良いのではないかと思います。

こちらが、節目節目で行われてきたことをまとめたものです。本学は周年記念事業によって学園を発展させてきたことが分かります。瑩山禅師の六百回大遠忌記念事業として本学が始まり、百年が経過して、今年から来年にかけて本山でも大遠忌の様々な催しが行われます。

中根環堂先生は、常々「教育は国家百年の大計である」と仰っていたそうです。総持学園は、百年間、多くの方々のおかげで発展をし、今を迎えることができました。この発展を引き継いで、また、次の世代に渡していかなければならないと思います。

大変、僭越なことを言っているなと思いながらの発表ですが、これからますます学園が発展していくことを祈念しております。

中根環堂先生がよく仰っていたことですが、本学の教育に関する根本的な考え方は変わりません。ですが、世の中の流れに合わせて変えていくところは変えていく、それは世の中のためになると思って変えていくところですから、根本は変わらないけれどもそういう意味では時代に合わせてやっていくというところも大いにしていきますというこ

とです。不易流行という言葉がありますが、創立百周年に際して、中根環堂先生の思いとか三澤智雄先生の思いを振り返って、ますます学園が発展していければというふうに僭越ながら申し上げたところで、私からの発表を終わりにさせていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

（はしもと　ひろみち・鶴見大学仏教文化研究所副所長）